

あいぽーと通信

令和4年
(2022)
3月発行
第60号

トピックス
Topics

- 特集：生きづらさを抱える子どもたち～貧困・格差の現状から～
- 令和3年度「人権に関する児童生徒の作品」「人権尊重～ひと・いのち・ふれあい～」
- ハンセン病フォーラム「ハンセン病を正しく理解し、差別と偏見のないともに生きる社会を築こう」
- あいぽーと徳島情報

あいぽーと徳島では、人権に関するさまざまなイベントを開催しています。

特集

第2回県民講座「子どもの貧困問題」(オンライン講座) 生きづらさを抱える子どもたち ～貧困・格差の現状から～

貧困家庭を生み出す スパイラルダウン

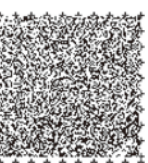
私が貧困の問題の取材を始めたのは、2005年にさかのぼります。小泉政権の「聖域なき構造」改革の中で非正規労働者を急激に増やしたのが2005年で、その結果、非正規労働者として働いている若者たちが、非常に不安定化した問題を番組で取り上げたのがきっかけでした。非正規労働は当時の若者にとって、会社に組織に縛られない働き方として魅力的に映っていた部分もありましたが、時給で働く労働者は、会社の業績などで簡単に切られてスパイラルダウンしてしまうという現実もありました。

たワーカーキングプアの最底辺に、高校生がいるというところがわかってきました。私たちが公立高校に通う生徒や教師に対して大規模なアンケート調査を行ったところ、高校生の半数以上にアルバイト経験がありました。アルバイト経験があること自体は社会経験として私は悪くないと思いますが、アルバイトをする理由に、「家計を支えるため」という回答が最も多かったという点が、非常に深刻だと思いました。専門学校や大学、短大などに進学するために奨学金を借りたものの、それが返せなくなつた若者たちの奨学金破産、そして奨学金中退、つまり借金だけが残つて学校の卒業資格を取れない若者も増えました。

一人で子育てをしているシングル家庭です。働き手が一人、特に女性の場合、80%が相対的貧困ラインに達しているというデータもあります。

一人の少女に見た貧困の実態

私が最初に高校生ワーカーキングプアの取材に取り組んだ時から今も取材を続けている、優子さん(仮名)という少女がいます。出会ったのは2015年の終わり頃で、彼女は高校生ワーカーキングプアの中でも特に厳しい状況におかれた少女だったと思います。母親はフィリピン出身で、父親は日本人ですが、離婚して母親一人で三人の子どもを育てているという家庭です。母親は朝と夜と深夜にトリプルワーク



(音声コード)

●あいぽーと徳島講演会延期のお知らせ

令和4年3月20日「被爆体験伝承講話～ビオラの音色とともに～」は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、開催延期とさせていただきます。新たな開催日等の詳細は、決定次第あいぽーと徳島ホームページ等でご案内いたします。

●ライブラリーからのお知らせ

新着図書・DVDのご案内

●一部を紹介します。ぜひご利用ください。

図書 認知症になっても だいじょうぶ! そんな社会を 創ってこうよ 徳間書店 藤田 和子	図書 少女たちが みつめた長崎 書肆保房 渡辺 考	図書 こどもSDGs なぜSDGsが 必要なかが わかる本 株式会社カンゼン 秋山 宏次郎 監修
DVD いわれなき 誹謗中傷との闘い スマイリー・キクチと 考えるインターネット における人権 東映株式会社 教育映像部	DVD 私たち 一人ひとりが できること ～当事者意識をもって 考えるコロナ差別～ 東映株式会社 教育映像部	DVD 知りたい あなたのこと 視覚障がい者の 生活・気持ち 東映株式会社 教育映像部

「人権学習応援コーナー」を設置

●4月1日から、人権学習を深めたい方や教職員の方にも活用していただける書籍・DVDをピックアップしたコーナーを設置します。どなたでもご利用いただけます。一部を紹介します。ぜひご利用ください。

図書 おもしろすぎて 授業したくなる 道徳 図解 明治図書 森岡 健太	図書 マイノリティ デザイン 「弱さ」を生かせる 社会をつくろう 株式会社 ライツ社 澤田 智洋	図書 身の回りから 人権を考える 80のヒント 株式会社 解放出版社 武部 康広
DVD カンパニユラ の夢 兵庫県 公益財団法人 兵庫県人権啓発協会	DVD 障害ってなに? 問いかける声 問われる社会 世界人権宣言 大阪連絡会議	DVD 部落解放運動 の歩み 人間は尊敬 すべきもの 社団法人 部落解放・人権研究所

人権相談のご案内

あいぽーと徳島では、人権擁護委員・弁護士による人権相談を行っています。まずは電話にてご連絡ください。

Tel.088-664-3701
(徳島県男女参画・人権課分室)

一人で
悩まず
お電話を

●人権擁護委員による相談	第2・第4土曜日 (10:00～16:00)	面接相談及び電話相談
●弁護士による相談(要予約)	第1・第3金曜日 (13:00～16:00)	面接相談
●弁護士によるインターネット 上の人権侵害相談(要予約)	偶数月の 第2金曜日 (13:00～16:00)	面接相談

[編集・発行]

あいぽーと徳島

徳島県立人権教育啓発推進センター
指定管理者 特定非営利活動法人 徳島ヒューマンネット
〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目14 沖洲マリンターミナルビル内
Tel.088-664-3719 Fax.088-664-3727
E-mail:info@aiport.jp

あいぽーと徳島 検索 <https://www.aiport.jp>

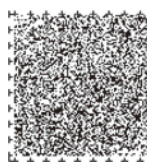
- 開館時間／午前10時から午後6時まで
- 休館日／月曜日(祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月29日から1月3日まで)

●公共交通機関のご案内 JR徳島駅前から徳島市営バス⑥番のりば・徳島バス[中央市場線]に乗りし、[沖洲マリンターミナル]にて下車。



お車を利用の場合、ビル西側駐車場の「あいぽーと徳島」と表記のある赤いコーンの場所に駐車してください。
満車の場合は、ビル北側の県営有料駐車場をご利用ください。
●3時まで200円

(音声コード)



をしていて、家にいる時間がほとんどないため、家事の一切を優子さんが担っていて、かつアルバイトをして家計を支えているという状態です。

その過酷さは、高校生にこれほどの負担を負わせていいのかと思えるほどでした。朝は4時に起きて家族のご飯を作り、掃除と洗濯をし、朝ご飯を弟と妹に食べさせて送り出します。高校では6時間の授業をみっちり受けて、放課後には夕方5時から夜10時まで居酒屋でアルバイトをし、11時に帰ってきて宿題をして夜中12時半から1時に就寝、また翌朝4時に起きる、そんな生活を送る365日続けているんです。学校では普通の女子高生と変わらない優子さんがそれほど厳しい状況にいるということに、周囲は誰も気づきません。ですから私たち取材チームは子どもの貧困を「見えない貧困」と呼んで、より深刻だと問題視してきました。

取材対象の子どもたちは

みんな明るくて元気でしたが、こんな子たちに些細な何かがあると、子どもたちの努力によってつなぎ止められている家庭が一気に崩壊し、命のリスクさえ生み出しかねないという恐怖も感じます。子どもたちはパワフルに、ポジティブに家族を支えていて、そのことが世帯としての貧困も見えにくくしていると感じました。

■子どもの幸せが

豊かな日本につながる

そういった状況に対して、どんな取り組みが進んでいるでしょうか。愛知県では、シングル家庭の生活困窮世帯を対象にした食料支援が評判になっています。この取り組みでは世帯の状況によって量や内容を調整しながら食料を送るというもので、専門家からも現金での支援に比べて確実に栄養状態を改善することができると評価されているとともに、年間600万トンから800万トンと推計されるフードロスの削減につ

ながるとして、このモデルを踏襲した生活困窮者支援が各地に広がっていると聞いています。

そして子ども食堂という取り組みも徳島を含め全国に広がっており、何万という数になつていていると思いますが、草の根の活動をこうして広げていく日本人の「誰かを助けたい」という意識に感動するとともに、一方で制度の機能不全が正されていないことに、忸怩たる思いを抱えたままです。

また公立高校の学費は無償化されましたが、まだ教科書代や制服代は負担が残ったままですし、部活動などの諸経費についても支援がまだまだ広がっていません。高等教育に結びつく子どもを増やしていくことが、日本の将来を豊かにすることにつながると思います。私自身も情報を発信していきますし、皆様にも子どもの貧困を一刻でも早く改善していただけるように思いを寄せていただければと思います。

●講師プロフィール

いた がき よし こ

板垣 淑子さん

NHK報道局ニュースウォッチ9編集責任者

1994年 NHK入局。報道局制作センター、大型企画開発センター、報道局社会番組部、名古屋放送局報道部を経て、現在、報道局ニュースウォッチ9編集責任者。主な担当番組は、NHKスペシャル「ワーキングプア～働いても働いても豊かになれない（2006年）」（ギャラクシー賞大賞）、同「無縁社会～無縁死 3万2千人の衝撃～」（菊池寛賞）、同「終の住処はどこに 老人漂流社会」（2012年）、などを制作。2015年、放送文化基金賞個人賞を受賞。

ハンセン病フォーラム 「ハンセン病を正しく理解し、差別と偏見のないともに生きる社会を築こう」

●令和4（2022）年2月10日（木）
ときわホール（オンライン開催）

① 講演 1

黄光男（ファングアンナム）さん

〔元患者家族〕

「閉じ込められた命

―問われているのは誰ですか―」

② 講演 2

黒尾 和久さん

〔重監房資料館部長〕

「ハンセン病資料館・

重監房資料館に関わって」

③ シンポジウム

進行／

徳山 富子さん

〔徳島県人権問題講師団講師〕

パネラー／

森 和男さん

〔国立療養所大島青松園自治会長〕

黄光男さん

黒尾 和久さん

「差別をしてはいけないことはみんなが知っているのに、知らないうちに差別する側になってしまう。だからこそ、自分の中にある差別意識と向き

合い差別に対して怒りを感じて差別に立ち向かう人間になるような啓発が大切である。」そう話す黄さんからは元患者家族として、ハンセン病の誤った情報により、ハンセン病患者の家族であると知られると強い差別被害を受けたが、家族がどのような苦しみを味わってきたのかまだまだ知られていないので、家族の証言も併せて学んでほしいことが伝えられました。

黒尾さんからは、国立ハンセン病資料館は、国立療養所多磨全生園の入居者自身が、自分たちの歴史について資料を集め始めたことに起源があることや、2014年に差別と偏見の解消を目指す普及啓発の拠点として設立した重監房資料館について紹介がありました。ハンセン病患者への懲罰に使用された「重監房」には、正式な裁判も行われず、延べ93名が収監され23名が亡くなった



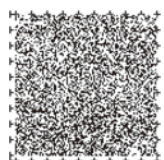
と言われており、重監房の跡地を見ることで、その異様さや間違いを実感してほしいこと。今後の啓発を進めるのに、語り、場所、物を残すことも大切なことであることが説明されました。

大島青松園自治会の森さんからは、全国の入居者も948名となり、平均年齢も87歳を超えるなど高齢化が進んでいると

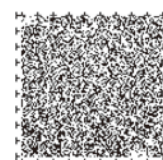
いった療養所の現状について説明がありました。そして、ハンセン病回復者が家族にすることを隠すことがない社会へ理解は進んでいるが、家族との関係回復がまだまだ進んでいないことを語られました。

進行の徳山さんからは、自分から知ろうと思わなければ、少数者の存在や思いに気が付かず、少数者を苦しめているのが、多数者である自分自身であることにさえ気付かずに生活をしている。また今、新型コロナウイルス感染症患者となつても差別を恐れなくてもよい、誰もが安心して暮らせる社会を作るために、自分のこととして捉え差別に立ち向かうという第一歩を踏み出して欲しいと語られました。

最後に、今後の啓発活動についても意見交換がされました。



（音声コード）



（音声コード）